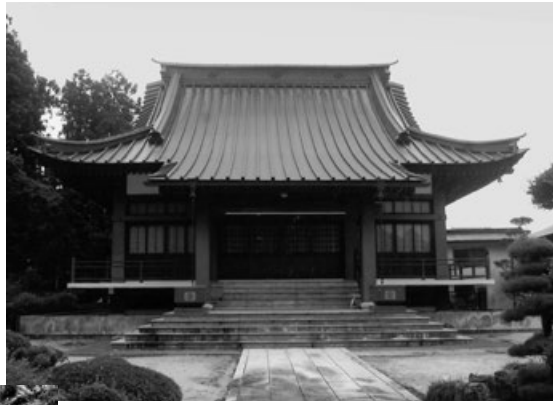


宍戸安芸守朝重開山の教住寺



教住寺本堂



宍戸朝重供養碑と五輪石塔

笠間市住吉にある教住寺は、宍戸朝重(朝里・朝家)が開山で、住吉山松林院と号する時宗の名刹です。時宗の開祖は捨聖と崇められた一遍上人で、本山は神奈川県藤沢市の清浄光寺(遊行寺)です。貞和二年(一三三六)、朝重が天台宗の廃寺に新たに時宗の他阿自空を招いて住吉道場を開き、それが教住寺になりました。

宍戸朝重は、鎌倉幕府滅亡後、建武の新政・南北朝の動乱期に足利尊氏に従い、各地を転戦し戦功を挙げました。『太平記』に「宍戸安芸守ハ物馴タル剛ノ者」と評され、関東にその名が轟いていました。各地を転戦しながら、小鶴荘を地頭請所として支配し、湯崎の字館内に湯崎城を築いています。

戦乱の時代を生きた朝重は、他阿自空と「南無阿弥陀仏」を通して、当地方の平和と救済を祈願しました。当地方は、交通の要衝で東南に向えば鹿島へ、途中の柏井地区には親鸞伝説が残っています。西に行けば垂柳(小原)・笠間・下野国(栃木県)に通じています。教住寺の縁日は、参詣客で溢れ、門前に市が立つと言われるほどの賑わいだったと伝えられています。

繁栄を極めていた教住寺も、戦国・安土桃山時代になると、宍戸氏が衰退し、檀那を失い困窮に陥りました。江戸時代になると、北出羽地方(秋田)から秋田実季が五万石で宍戸に入封しました。元和二年(一六一六)、教住寺は火災により堂宇を失いましたが、秋田氏の支援により復興することができました。正保二年(一六四五)、秋田氏が三春(福島県)に転封となり、宍戸地方は幕府領となりました。慶安元年(一六四八)、幕府より朱印地七石が授けられ、さらに寛文四年(一六六四)には水戸藩主徳川光圀から鐘楼堂の寄進を受けました。天和二年(一六八二)、光圀の弟松平頼雄が宍戸藩主となり、教住寺を支援しました。

明治になって、神仏分離令・廃仏毀釈により存亡の危機に瀕しましたが、住職・檀信徒の尽力で危機を脱することができました。ところが、明治三十九年(一九〇六)五月に本堂・庫裡・熊野社などを焼失してしまいました。同年八月に仮本堂兼庫裡を急ぎ再建して、かろうじて風雨を凌ぎました。さらに大正中期にも暴風により山門が倒壊、昭和十四年(一九三九)には鐘楼の焼失と苦難が続きました。

昭和四十七年(一九七二)に現在の本堂が再建され、その後、客殿・書院・観音堂が復興し、庭園・墓地も整備され、かつての名刹の風貌を取り戻しました。

教住寺の本尊は銅造阿弥陀三尊像(善光寺式、釈含みの阿弥陀如来)で、笠間市の文化財に指定されています。宍戸の新善光寺の銅像阿弥陀三尊像(市指定文化財)も所蔵しています。また、閻魔大王・十王像・四天王像・観音像・琵琶を持つ弁財天像が安置されています。『一遍上人絵詞伝縁起』・『播州問答集』・『一遍上人語録』・『六條縁起』・『浄業和讃』などの貴重な書籍も保存しています。連歌の始祖といわれる菅原道真の画像もあり、その前で歌会が開かれていました。住吉共有墓地には、宍戸朝重供養碑と三基の五輪石塔が立っています。

境内には、ケヤキ・マツ・シユラ・コウヤマキなどの大樹、ウメ・サクラ・アシビ・ツツジ・アジサイ・ヒガンバナ、モミジなど四季折々の花がきれいに咲いています。

現住職は、一遍上人の「踊念仏」を復興されま修しています。茨城県の時宗寺院の中でも特異な存在です。文化財を保護し、地方文化の発信地となっています。

(市史研究員 南秀利)